

一本でもにんじん

今野尚子

「一本でもにんじん」という歌がある。

この歌の一番の眼目は「一↓に」、「二↓サン」、「三↓ヨ」、「四↓ご」という数の対応にあるのだが、ここでは別のことに注目したい。すなわち、この歌では数の下の単位部分がそれぞれ異なっているのである。

にんじんは「一本」であり、サンダルは「二足」であり、ヨットは「三艘」であり、ごましおは「四粒」であるというように。

この数える単位を助数詞とよんでいる。数えられるものが何であるかによってどの助数詞を使うかはほぼ決まっている。にんじんの「一本」、サンダルの「二足」、ヨットの「三艘」などは多くの人にとって動かないものであろう。しかし中には、場面によ

って複数の助数詞を使いわけているものもある。助数詞にも時代の推移にしたがって使われなくなったもの、あるいは新たに使われるようになったものなどがあるからである。そのいくつかの例を見ていこうと思

1 カニを数える

二ひきの蟹の子供らが青白い水の底で話していました。(宮沢賢治『やまなし』)
生物としてのカニは一般に「匹」で数える。ところが食物として売られるカニに

「匹」を使うことは少ない。

一パイ約四〇〇gズワイガニ

五ハイ(一パイ約二〇〇g) 甲函ガニ

(一九八七、一採集)

右の二例は通信販売のカタログから採集したものである。スーパーマーケットの広告でもワタリガニならば「ハイ」の例を見出すことはできる。しかし「タラバガニ」や「ズワイガニ」を「一匹」そのまま売買することは一般の小売り店では少ないようである。庶民にとって「一パイ」では高価すぎて日常の買い物としてはふさわしくないということなのであろう。手許の広告をみるとつぎのようになっている。

タラバガニ100g当り458円

ズワイガニ100g当り238円

(一九八六、十二)

さらに「肩」という例を最近見出した。

ズワイガニ 3肩980円

(一九八六、十一)

広告でこの例をみつけ、さっそく実見したところ、脚が三本ついたズワイガニの半身(正確にいえば十分の三身)がバックされて並んでいた。つまりこの広告制作者はズワイガニの脚を腕と見立て、さらにその腕が胴とつながっている部分を「肩」と見

立てたのである。そして肩が三つ分だから「3肩」としたのであろう。助数詞には数えられるものの形状を想起させる働きをもつものがあり、この「肩」もなかなか工夫された使いかただといえる。助数詞としての「肩」は従来、駕籠をかつぐ人数を数えるときのほか、方言で荷の単位として用いられる程度である。ズワイガニの「肩」はこれまでのところ同じ店の広告から二例採集しただけである。今後の運命を見守っていきたい。

2 チョウを数える

「……でもゴンジー、あなたは間違ってるぞ、蝶々だって一万匹も集めたらきつと飛べるさ、あなたにはきつと悪いくせがついてるんだ」

(村上龍「たいじょうぶマイ・フレンド」)
チョウを数えるにも「匹」を用いるのがもつとも一般的である。しかし少しさかのぼると、夏目漱石や芥川龍之介の作品に「羽」の例を見出すことができる。

寂然と倚る亞字欄の下から、蝶々が二羽寄りつ離れつ舞ひ上がる。

(夏目漱石『草枕』)
よし来たと云つて、丁度部屋へ飛んで来た蝶々を一羽突いて見せてやつた。

(中里介山『大菩薩峠』)

ところでチョウを数えるにはもうひとつ、「頭」という助数詞を使う場合がある。これについて、『虫の民俗誌』の中で梅谷猷二氏はつぎのように述べている。

じつは、昆虫の関係者のなかでは、専門研究者も趣味家も、おしなべてきわめて常識的に昆虫を一頭、二頭とかぞえているのである。

梅谷氏が「その登場は明治中期以降らしい」と推定するとおり、チョウの「頭」はそれほど古くはないようである。しかし現在では、チョウの「匹」と「頭」とついて場面による使いわけが確立しているということができる。

文化財保護法で国の天然記念物に種指定されているウスバキチョウが十六匹(うちメス二匹)。ラベルには昨年七月八日、十日、北海道・大雪山で採集とある。……

「標本屋に頼まれて採集した。百頭

(匹)はとらないと旅費さえ出ないよ。……」

(「朝日新聞」一九八四、九、二十四)
また「週刊朝日」(一九八二、三、十六)

には
専門家は蝶を一頭二頭と数えるが一般には匹でよいとある。

以上述べてきたのはむしろ新しく使われるようになった助数詞の例であるが、現代の日常生活から助数詞を採集すると、「本・枚・点・個・台」など数種類のもので大部分が占めてしまう。いくつかの助数詞の用法が拡大して特殊なものがあまり使われなくなったこと、新しく生まれたものにはこれまでにある助数詞をあててすませてしまいうことがその原因である。名詞の数に比べて現在採集できる助数詞の数はあまりにも少ない。わたくしたちの生活から失われつつあるもののお大きさを考えてみるべきではないだろうか。

(付記) 本文中使用した用例は今野真二・今野尚子両名が採集し、現在は山田忠雄研究所に帰属するものである。